

令和３年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
運営指導委員会・検証委員会

【運営指導委員】

氏 名	職 名	所 属
ウィリアムズ ジェイソン	准教授	ノートルダム清心女子大学
神崎 浩二	事務局長	岡山県経済団体連絡協議会
林 俊克	教授	就実大学
福本 昌之	教授	広島市立大学
松原 憲治	総括研究官	国立教育政策研究所教育課程研究センター

【検証委員】

氏 名	職 名	所 属
小川 正人	副学長 教授	環太平洋大学
出島 誠之	代表取締役	株式会社出島プランニング

第１回運営指導委員会及び第１回検証委員会

１ 日 時 令和３年８月２４日（火）１４：００～１６：００（オンライン開催）

２ 参加者 運営指導委員，検証委員
管理機関
校長，副校長，教頭，各担当者

３ 内 容 （１）開会 （２）岡山県教育委員会あいさつ
（３）拠点校校長あいさつ （４）出席者紹介
（５）今年度の事業計画について ①管理機関より ②拠点校より
（６）指導助言・協議 （７）その他
（８）閉会

４ 議事録

○：運営指導委員，検証委員 ●：学校

[各委員から]

- SGH の実績や昨年度の取組を引継ぎながら，今年度の事業をスムーズに進めることができていることが窺えた。
- AL ネットワークの「岡山県版中高一貫課題研究メソッド」は非常に期待ができる取組だ。高校を対象にした課題研究の方法に関する冊子は多く作られているが，中高一貫を対象にしたものはあまりない。特に中学校と高等学校の接続部分に焦点を当てると，非常に価値のあるものとなる。
- また，連携校のなかに岡山工業高等学校が入っているが，工業高校は早くから STEAM 教育を先進的に行ってきている。そこに焦点を当て，工業高校の取組を価値付けしていくとともに，普通科高校の生徒たちにも，工業高校がこんなにすごい取組をしているということを伝

えていくことが大切である。

- 研究の方法について、「データサイエンス基礎」で、構想計画書には「架空のテスト結果」を使うとあったが、データはできるだけ実際の数値、例えば JICA 中国は SDGs 関連のデータなどを持っているはず。そのような生徒の関心にも合致した実際のデータを用いる方が良い。説明にあった偏差値を用いた活動などはまさに生徒の関心が高いデータなので良いと思う。
- 「科学技術コミュニケーション」については、T.T. (ティーム・ティーチング) で複数の教員が協働するとあるが、初めから全員が共通理解、共通認識をもって進めていくのは難しいかと思う。指導に当たった教員の実際の声、現実的な課題等をきちんと拾い、記述に残し、経年での変容を追っていくことが、他校への成果普及の際に、有益な情報になってくるかと思う。
- 「未来航路」については、教科等の内容との往還が重要である。現代的な課題を扱いながら、各教科の固有の内容や中核的な考え方をどのように使っているのかを見えるようにしていくと、教員にとっても各教科とのつながりがわかり、生徒にも各教科の見方・考え方が大切だということが伝わっていくはずである。
- 大学の教員からの指導助言については、教員の働き方改革という観点からも大事である。探究活動を高校の教員が全て指導するのは大変なので、コンソーシアムの大学や民間企業の方も借りながら進めていくことは取組の体制として重要である。
- 事業評価について、生徒アンケートを取る場合、2 年目、3 年目は生徒の目が肥えるため、評価が厳しくなり、数値が下がってしまうことがある。この場合、生徒の見方が深くなっているわけであり、それを捉えることができるように、生徒に対して記述やインタビューを行い、質的なデータを取っておくとよい。また、大学に進学した生徒に追跡調査を行うことも有益である。
- 非常に素晴らしい取組を進めていると感じたが、活動の三つの柱のうち、「社会の多様性への理解の促進」について、考え方として十分でない部分があるかと思う。日本に住んでいる外国人の視点から見ると、この「社会の多様性」は、「国際社会の多様性」もしくは「グローバル社会の多様性」のことであるように感じられる。それだけではなくて、「日本社会の国際化」や「日本社会の多様性」についても意識した取組を行ってもらいたい。例えば、岡山の外国人人口は 2 万人以上、そのうち約 5 千人が永住権をもっている。国際交流センターや岡山市外国人市民議会などといった関係機関と連携し、そういった外国人たちとの交流を図っていくことも重要である。
- 「SOZAN 国際塾」の取組では、オーストラリアの姉妹校との交流が年四回、岡山大学の外国人留学生との交流が二十回計画されているが、生徒とほぼ同年齢の外国人との交流だけではなく、岡山に 10 年、20 年在住している外国人との交流も加えていくことによって、課題研究などで取り組んでいるグローバル課題の理解、あるいは岡山のローカルな課題、例えば、日本語の指導が必要な子供、教育が必要な移民の大人、子供たちの問題などについて、考えることができ、本当の意味で「社会の多様性への理解の促進」につながっていくのではないか。
- SGH の運営指導委員として指摘したことも含め、課題を乗り越え、発展させた取組となっていることに感服した。現在、我々が大学で取り組んでいることと非常に近く、中学校、高等学校の取組としては大変レベルが高いと感じた。この取組を確実に進めていくと、高い成果が期待できるのではないかと思う。

- SGH もそうだが、こうした取組は成果の検証が極めて難しい。今回は検証委員会が設置されているので、専門の委員を中心に検討してってもらいたい。基本的には、非常に労力をかけて作成している Global Can-do List においてあるべき姿が示されているので、これをうまくループリク化して、それを当事者と第三者が分析する形になれば、良い成果検証ができるのではないかな。
- 取組全体に関して、少し優等生すぎるという印象をもった。今回の事業は、ただエリートを育てるということではなく、SDGs をうまく反映することのできるグローバルリーダーの育成ということが根底にある。しかし、取組の内容を見ると、社会のなかの一部の人にとっての課題を扱うものになっているような印象がある。そうではなくて、より広い視野に立って、多様な人たちを、ただデータとしてではなく、人間として見て考えるという機会をもってもらいたい。A 委員から提案のあった、岡山に住む外国人との交流を考えていくのは良い方策なのではないかな。
- 「未来の岡山と世界の Well-being の実現」という非常に大きなテーマを掲げているが、
「Well-being」を 20 才前後の生徒たちがいかに理解できるか、というのが本事業のポイントであってほしい。日本ではなかなか「Well-being」という言葉がうまく理解されないのではないかなということを感じている。昨年度、教職大学院で 40 代の現職の教員を指導していると、彼らの多くは今の小学生の子供たちの未来を、管理職となったときどうやって作っていくかということ自分の使命として真剣に考えていた。そうしたなかで、「Well-being」とは一体、何か。あなたの心の中には、子供たちにとってあるべき「Well-being」が確かにあるけれど、それは子供たちに共有されている「Well-being」なのだろうか、と思っていた。今年、18 才、19 才の学生の指導をしていると、彼らの頭の中にある未来は、とりあえず大学に入ってくることである場合が大半であった。彼らは高校時代に何を学んでいたのか。
「良い大学」に入り、大学に入ったら何かが開けるだろう、という予定調和的な未来しか描けていないということである。一方で、何人かの学生のなかには、岡山操山高校が取り組んでいるような活動を通して、強い意志をもって大学に入ってきている子がいる。これは偏差値が高い、低いの問題ではなく、いかに学びに対する指向性をもっているかということの違いである。例えば、AO 入試で入学してくる学生は、必ずしも受験学力は高くないが、これを学びたいという意志を強く持っている学生が多い。そういう学生と話をしていると、彼らは自分たちなりの「Well-being」をもっている。それは例えば、社会貢献意識をもっていたり、多様性を理解していたり、あるいはジェンダーに対して強い怒りをもっている学生もいる。彼らを見ていると、いかに他者との交わりの中で学んでいくことが大切かということ強く感じる。
- 今回の事業においては、彼らが学んでいることの価値付けをどう発見させることができたか、ということが事業全体の評価につながってくるのではないかなと考える。教育というのは、教える側は見えていても、学んでいる側は何を学んでいるかが見えにくいという非対称性を強く持っている。生徒たちは「やらされた」という感覚が強いため、自分たちが何を学んだかということについては、一旦、一歩引いて距離をとる必要がある。だから、生徒たちの自己評価を大切にしてもらいたい。B 委員が指摘しているように、いかに彼らが学んだかということ記録として残しておくことが重要だ。それに加え、この事業に関わる他校の高校生や中学生のデータも残しておいてもらいたい。他者との関わりにおいて学んだという経験を、岡山操山高校だけではなく、この事業に関わるすべての高校生にもってもらいたい。それが学ぶということの意味であると考え。これは数値的な評価とは少し違うかもしれないが、特に「STEAM」のなかの Arts を意識した取組になってくれると良いかなと思う。

- 昨年度から岡山操山高校の課題研究の指導に関わっているが、非常に真面目な生徒が多く課題に一生懸命取り組んでいるが、一方で、どうしても正解を求めてしまう、先に正解に対する自分の考えがあり、その結論にどういう風に到達するかという学習の過程が目についた。そうした生徒に対して、指導のなかでは、もっと悩んでください、もやもやしてください、いらいらしてください、そのためには実際に関わることができる方へのインタビュー、現地でのフィールドワークが大切だということを伝えた。多くのグループが悩んで、迷っているところかと思うが、それが課題研究だと思う。
- 事業の検証についてであるが、なかなか難しい。先程の課題研究のような悩んでもやもやしていく過程を、何をもってどう評価していくか、また、連携校も含めた事業の成果をどのように考え、見取っていくか、それは数値化できるものであるのか、などの課題がある。一つの方法としては、古いやり方かもしれないが、生徒に日々、取組の記述をさせ、それを蓄積していくということが評価のためのデータとなるのではないかと考えている。また、その記述の蓄積のなかで、生徒の気付きにもつながってくるのではないかしらと思うし、それを相互に発表させることや、ポートフォリオのような形にしていく方法も評価のひとつの手掛かりとなるのではないかと。また、検証の方法については、改めて考えていきたいと思う。
- 成果検証について、大学の講義で、学生には毎時間、学んだこととそこから得た気付きを書くレポートを課している。その記述を見ていくと、最初は、「やらされている感」が強いが、講義を重ね、記述を重ねていくにしたがって、「学んだことがこういうことに役に立つ」という気付きに変わっていく。何度も繰り返し学んだことを言語化していくことによって、彼らのなかに定着していつているのを感じる。そのようなテキストマイニングを行うと、生徒の気付きや学びを見取ることができるので、C委員が指摘したような日々の学びの気付きを言語化させていくのは意味があるのではないかと考える。

[質疑応答]

- 毎日、自己評価を書かせるのは、生徒にも教員にも負担が大きく、難しいと思うが、どのように進めて行けばよいか。
- 評価のための記述ではなく、あくまでも授業で学んだことの振り返りとして書かせることが大切。生徒が今日の授業で何を学んだかを自分で振り返らせるだけでいいので、各授業の終わりに2分程度その時間をとってやるだけで良い。それくらいであれば、大きな負担にはならないのではないかと。

第2回運営指導委員会

1 日 時 令和4年2月9日（水） 14：00～16：30（オンライン開催）

2 参加者 運営指導委員
管理機関
校長，副校長，教頭，各担当者

3 内 容 （1）開会 （2）岡山県教育委員会あいさつ
（3）拠点校校長あいさつ
（4）事業報告 ①管理機関より ②拠点校より
（5）オンライン授業参観 （6）指導助言・協議
（7）その他 （8）閉会

4 議事録

○：運営指導委員 ●：学校

[各委員から]

○前回と同様，生徒も先生方も，非常に素晴らしい活動を進めている。

○ SOZAN 国際塾（以下，「国際塾」という。）について，コロナ禍で国際交流の取組を進めることが，非常に難しい中で，岡山大学の留学生との交流会を 10 回，実施できているのは大変素晴らしいが，この交流相手の留学生の出身国，出身地域の構成が分かれば教えてもらいたい。最近，私の子が，フランスやアフリカなど，英語圏以外の出身国の ALT の英語がよく分からないと言っている。姉妹校の SHC はオーストラリアで英語圏であるし，岡山操山高校に勤務している外国人の英語教諭も英語圏の出身なので，生徒たちは英語圏の人の英語に触れる機会が多いと思うが，そうであるからこそ，英語圏以外の外国人と英語での交流を経験させていくことには意義があると思う。

○気になったのは，これだけ英語を使う機会が多いはずなのに，6つの資質・能力に関するアンケート調査で，「30.英語でコミュニケーションを取ることができる。」，「31.英語でプレゼンテーションやディスカッションをすることができる。」という項目に対する生徒の自己評価の平均値が低いのはなぜなのかということだ。その理由や，GLOBAL STUDIES（以下，「GS」という。）の英語に関する数値との関連などについて，学校として分析はしているか。聞かせてもらいたい。

○コロナ禍において，様々な工夫をしながら取組を進めていることに敬意を表する。

○未来航路の取組の説明の中で，昨年度から生徒に一人一台 Chromebook を持たせて，活用していることの功罪として，生徒がグループ内でのコミュニケーション不足に陥るといったことが挙げられていたが，逆に ICT の導入が進んできたからこそ，離れた場所にいる様々な人と，オンラインでつながることができたり，自由にコミュニケーションを取ったりすることができるようになったという側面もあるのではないかなと思う。そういった様々な ICT ツールを有効に活用していくということも大切なのではないかな。

○デジタルツールの活用については，SNS を通じて自分の考えを発信したり，必要な情報を得たりするなど，生徒たちの方が大人よりもずっと得意で，使いこなしているのではないかなと思う。しかしその反面，自分たちと異なる意見を受容するということができなくなっている面もあるのではないかなと思う。そうしたことも，コミュニケーション不足ということにつ

ながっているのかもしれない。

- 本日、オンラインで授業の様子を参観したが、授業の中でできるだけ双方向のやりとりをする場面を作ってもらいたい。例えば、パブリック・コメントを教材に使った主権者教育にもつながる授業はとても興味深いものだったと思うが、参観した授業場面に限って言えば、一方的に話を聞いているものだったので、それをもとにグループワークなどを行い、様々な異なる意見について、どのようにして受け入れていくか、あるいは議論を交わしていくか、といった経験をさせていくことが重要なのではないかと思う。また、講義を聞くにしても、スクール形式で前を向いて聞かせるのではなく、小グループごとに向きあう形にするなど、お互いがどういう反応をしながら聞いているか、ということがわかるようにしていくのも一つの方法かと思う。
- また、授業の中で紙のプリントを配付していたが、最近は様々な会議において、デジタル・データで共有するということが一般的になっていると思う。Chromebook を各自に持たせていることもあるので、そうした ICT ツールの効果的な活用についても考えてもらえればと思う。
- 国際塾においても、オンラインを上手に活用しながら、通常ではできないようなことが、かえってできるようになった、という面も多くあったのではないかと思う。新型コロナウイルスが時代の変化を加速させているということを、先生方も感じているかと思うが、これからの社会においては、オンラインを活用して成果を出すということが求められてくるだろう。今後もオンラインのツールをフルに活用しながら、そうした社会を生き抜く資質・能力を身に付けた人材育成ということについても意識してもらいたい。
- 未来航路のディスカッションに関するプログラムが、従来のディベートからパブリック・コメントに変更された経緯について聞きたい。ディベートは、多様性を理解させるという点において、非常に優れた教育ツールである。ディベートというと、相手を論破する、論理でねじ伏せる、といったイメージがあるかもしれないが、本来は、自分の考えと違う意見であっても、論理的に組み立てて説明することが要求されるものである。例えば、エデュケーショナル・ディベートなどでは、肯定側と否定側を抽選で決めることがある。つまり、どちらかの意見を持っていることではなく、どちらの意見でも論理的に説明することができるということが求められ、その過程のなかで、多様性が理解されていくという優れた教育的メカニズムをもっている。もちろん、今回のパブリック・コメントについても非常に素晴らしいプログラムであるが、ディベートをやめる必要はないのではないかと考える。
- SOZAN STEAM についても非常に優れた取組で、大学で行われていることに近いと感じた。気になったのは、科学技術コミュニケーションのチーム分けの講座について、この授業の答え合わせとは何かということである。計画のように、考えたチーム分けをもとに実際にドッジボールをして検証するということで本当に良いのか疑問だ。むしろ、様々な意見を出し合い、皆のコンセンサスのもとにこういう考えでチーム分けを決めたということで十分成果として見てよいのではないか。最後にドッジボールで楽しむのは構わないとしても、それをもって検証するというのは必要ないのではないかと感じた。このような形の教育活動、学びには正解はない。それに対して答え合わせをしようとするのが、中等教育の良い面でもあり、また悪い面でもあると考えている。大学との接続を考えたときに、正解のない問いがあるのだということも理解させていくことが必要である。
- 国際塾について、2年生の塾生が11人であるのに対して、今年の1年生は23人に倍増しているが、何か理由があるのか。そして、これだけ高度なプログラムを実施していくのに、人数として可能かどうかのキャパシティの面ではどうなのか。23名でぎりぎりなのか、それ

とも 50 人くらいでも大丈夫なのか。もちろん、これだけの高いレベルの教育は、できるだけ多くの生徒に経験させた方が良いが、一方で人数を増やすことで質を維持できないという面もあるかと思うので、理想的な規模がどの程度なのか、そしてそれを実現するためにどういうシステムが必要なのかということについて、もう少し詳しく聞きたい。

○グローバル合宿では、情報分析学の講義、演習が行われ、生徒たちの反応も肯定的であったということだが、具体的にどのようなテーマで実施されたのか知りたい。非常に良いものであるならば、大学でも参考にしたい。

○A 委員が指摘していた、英語を母国語としない留学生との交流については、とても大切なことである。私の勤務する大学でも、例年、1 年生を二日間英語漬けにする、イングリッシュ・キャンプを実施していたが、この 2 年間はコロナ禍で中止となった。代替として、バーチャル留学として、マレーシアの大学に講義を配信してもらったり、現地のガイドに市内を案内してもらったりするなどのオンラインプログラムを実施した。内容的にも良かったが、何よりもマレーシアの人たちの、あまり完璧ではない英語に触れられたということが良かった。そのような英語であっても伝わるのだということを、学生に感じさせることができた。そのように、完璧な英語を喋らなくてよいのだということを意識付けるという意味で、英語を母国語としない人たちとの交流の機会をもつことは、非常に重要である。

○GS に関しては、非常に緻密に進めていると感じた。前回の委員会で、これだけしっかりした仕組みを作っているのだから、ループバックを作成して定量的な方法で進めていけばよいということのを助言したが、それもきちんと取り入れながら進めており、良い数字も出ている。ただ、気になるのは、生徒の自己評価だけを基にするのでよいかということ。大学で学生に講義の評価をさせると、内容が簡単で、すぐに単位を出してくれる授業は評価が高くなり、課題が多く、難しい授業は評価が低くなるという結果になりがちである。また、もう一つの側面として、生徒の目が肥えてくると、今まですごいと思っていたものを、すごいとは思わなくなってくるため、必ずしも取組が進んだからといって、次の評価が高くなるとは限らない。そうした結果を避けるためにも、生徒の自己評価だけではなく、その生徒がどれだけ成長したのかという教員側からの評価や、生徒同士の相互評価をさせるなどといった、別の評価のシステムを加えていくと、さらに良くなるのではないか。

○これらの岡山操山高校の充実した取組が共有されていくこと、県全体、さらには県を越え、高校教育全体を色々な角度から検証できるような仕組みにつながっていくということが大切で、それこそが、この WWL という事業の本来の意図なのだろうと思う。指導方法などの各論について意見は色々あるかと思うが、重要なことは、全体像としてこの取組がどういう人を育てようとしているのかということであり、それによって、ある教育方法や考え方が効果的であるかどうか明瞭であるというのが最大のポイントであると思う。そういう点で、各論については、学校の中できちんと合意を得ながら進めている取組であれば、何が必要で何が不必要かということについての議論があってよいし、その観点から見直しが進んでいくことは素晴らしいことだと思う。

○生徒たちが WWL の取組全体に対してどのような感想を持っているのかということ、手応えを感じているのかということを知りたい。大学に進んできた学生たちから話を聞いていると、高校までの授業に対して、無理矢理やらされていたのではないかとことや、大学に入って、自由に学ぶということはこれほど楽しいことなのかと気付いたという感想を述べる生徒がいる。これについては、学校によってかなり差があるということを感じている。つまり、一方的に教えられたと感じている生徒と、学ぶ機会を与えられて高校生活がすごく充実していたと感じている生徒とに分かれているという実感がある。教員は生徒たちのそう

した手応えをどのように感じているのかということを知りたい。B 委員が指摘したように、教員の側が、そうした生徒たちの効力感、そして負担感についてどのように捉えているのかということが、評価という面でも重要なのではないかと思います。

- C 委員も指摘していたが、コロナ禍において、オンラインを駆使して、様々な人たちと時空を超えてつながることができるようになったということのメリットをポジティブに評価してもよいだろう。最近よく耳にする言葉として、ソーシャル・キャピタル、すなわち社会関係資本という言葉があるが、人と人とがつながること、お互い様という互酬性の関係、人と知り合うことで信頼関係が生まれること、そうしたつながり自体が大きな意味を持っている、ということがもっと自覚的に生徒たちに伝わると良いと感じた。

- 事業評価として、外部からの評価方法を取り入れることは良い。ただ、指標として用いているベネッセの GPS-Academic の問題例を見ると、かなり一般的な内容であり、岡山操山高校の WWL の取組をしっかりと評価できるのか、個人的には少し難しさを感じた。一般的に SSH や WWL の取組は多岐にわたることが多い。もちろん教育活動自体が全体的な性質を持っていることや、先生方の様々な思いが反映されていることもあるかと思う。一方で、特に育成しようとしている分野などに関して、中心的な学習指導を 2, 3 挙げて、それらに対して、事業評価用の資料を整理していく方法もあるかと思う。例えば、探究の課題設定を中心に指導している場合は、下記の観点から資料を集めて事業評価に使ってもよいかと考える。

- ・どれぐらいの数の生徒が自ら課題設定をできるようになったか、
- ・生徒が行った課題設定の視野の広さや専門的な深さ、
- ・生徒が課題設定の試行錯誤にかけた労力や過程、それに対する教員の支援等

- SOZAN STEAM について、前半の「データサイエンス基礎」に関して、統計分析の基礎知識、スキル学習自体が目的になってしまうと、教科の学習に逆戻りになってしまう。基礎的なレベルでよいので、探究的な学習を行いつつ、統計やスキルを身に付けるようにしたい。"理数探究基礎"の教科書などは参考になるかと思う。難しい事例も入っているが、簡単なものを選べばよい。取り組んでいくなかで、教員がそれをもとに改良していくなどなれば理想的である。

[質疑応答]

- 交流した岡山大学の留学生の出身国、出身地域の構成はどうなっているか。

●タイ、ミャンマー、ケニア、トリニダード・トバゴの 4 カ国である。

- 非常に良いと思う。加えて、前回の委員会でも述べたが、将来的には大学の留学生や姉妹校の高校生以外の外国人、例えば岡山に住み、生活している一般の外国人、企業人、大学の教員、研究員、ALT などといった人たちとの交流機会を持つことができれば、有益なものとなるので、検討してもらいたい。

- 6つの資質・能力に関するアンケート調査で、英語でのコミュニケーションに関する生徒の自己評価の平均値が低いのはなぜか。また、GS における数値との関連について、学校としての分析はどうか。

●生徒の英語の力については、授業改善を進めていく上で、客観的な指標として、定期的に受検している GTEC の結果の推移を見ているが、3 年生の英語の 4 技能に関しては順調に伸びている。授業の進め方については、英語科全体でコンセンサスを得ながら進めているので、1, 2 年生についても、同様に伸びていくことが期待される。課題としては、グループワーク、ペアワークにおける語彙力が不足しており、そのために深い内容に踏み込んだやりとり

ができないということだと考えている。日本人同士のやりとりの限界を感じながらも、語彙力のインプットを充実させてやれば、もう少し深い内容に踏み込んだ英語でのやりとりができるようになるのではないかと考えている。生徒の自己評価が低い現状において、教師側が授業における生徒のパフォーマンスをその場で直接評価してやることについては、抵抗感のある生徒も多く、慎重に進めていく必要があると考えている。ただ、生徒は自分たちのスキルを冷静に見ているので、各単元末に自分でチェックをする時間を設け、身に付いたスキルを自己評価できるようにしている。そのような形で、GTEC の客観的指標と生徒の自己評価とをフィードバックしながら進めていきたい。

○未来航路において、ディスカッションのプログラムをディベートからパブリック・コメントに変更したのはどうしてか。

●2年生後半の活動を、ディベートからパブリック・コメントへと変更した理由について、指摘のとおり、多様性の理解という側面など、ディベートにも良い点はたくさんあると思うが、昨年度までのディベートの取組を見ると、やや相手を論破することや、勝敗をつけることに重点があったように思われ、違和感があった。加えて、これまでは課題研究に取り組む前の段階でディベートを行うプログラムであったが、全体のスケジュールが変わり、課題研究を終えた後に、ディスカッションに関するプログラムを設定する必要があった。生徒たちは、課題研究によってたくさんの知識を獲得するとともに、SDGs を柱として社会課題について考えていく過程で、社会のマイノリティの立場から物事を捉えていく視点を学んでいる。それらを基に、自分たちが学んできたことを、どうやって身近な社会において生かしていくのかということを考えさせるために、高校生でも参加しやすいパブリック・コメントを使った活動を取り入れた。本日の授業は、岡山県の環境文化部からのコメント動画を視聴し、具体的にどういう見方でパブリック・コメントを考えていけばよいかについて確認した後、グループごとに Google Document の共有機能を使って、様々な意見を出し合う活動を行った。その中で、単に賛成か反対かという見方を越えて、弁証法的に考え、グループ内で対立した様々な意見が出される中で、よりよい社会を実現していくためにはどのように考えていくことが大事なのか、岡山県、岡山市のために何が必要なのかということについて、しっかりと話し合わせ、パブリック・コメントにつなげていく展開となっている。このようなプロセスで、学んだことを社会に生かしていくために考える力を伸ばしていくことを目的としており、実際にそのパブリック・コメントを提出するかどうかについては自由ということにしている。大学入試においても、単に知識だけではなく、学んだことと社会とのつながりを自分で考えていくことのできる力が求められているということもあり、そういう点でもこのような学習活動の必要性を感じている。

○国際塾について、昨年度と比較して1年生の塾生の数が倍増しているが、その理由は何か。国際塾のプログラムの人数の理想的な規模はどの程度か。それを実現するためにどのようなシステムが必要か。

●昨年度は、年度当初に新型コロナウイルス感染症のため長期の休校期間や活動停止期間があり、入塾のタイミングを逸した生徒がいたり、勧誘を十分に行えなかったりしたことが、塾生数減の原因になったと考える。今年度は、例年に近い取組ができており、その内容が口コミで広がり、例年よりやや多めの塾生数になっていると考える。塾生数のキャパシティや理想の規模について、学校全体として生徒の部活動への入部率が高いため、塾生が大幅に増加することは考えにくい。例年10～30人の間で推移している。そのため、その時の塾生数に応じて適切な取組内容や方法を検討したいと考えている。ただ、塾生数が大幅に増加した場

合は、担当教員を増やすことに加え、大学や関係機関等の外部協力が得ることができればありがたい。

○グローバル合宿において、情報分析学の講義、演習が行われているが、具体的にどのようなテーマで実施されたのか。

●テーマは、次の3つである。

- ・「PCR 検査をコロナ対応の政策判断に用いるのは間違いである」は本当か？
- ・「政府が若い人にまでワクチン接種を推進するのは無理がある」は本当か？
- ・「トランプ前大統領の『コロナはチャイナが作った』」は本当か？

各テーマにつき、5人グループで取組を行った。

○生徒は WWL の取組全体に対してどのような手応えや、負担感を感じているのか。また、教員は、生徒たちの効力感、負担感についてどのように捉えているか。

●生徒の活動の様子からは、プロセスの明確な取組については、積極的に取り組んでいる生徒が多いように思う。一方で、プロセスが多様で、一定ではない取組である課題研究については、取組に対して積極性や主体性に鈍さを感じる場面もあるが、卒業生からは、「大学で、例えば、プレゼンテーションを作成したり、データを分析したりするなどの活動に対して、他の進学普通科高校出身の生徒と比べて抵抗感なく取り組めるので、高校時代の課題研究で経験したことが非常に役に立っている。」という話を聞くことが多い。生徒は、進学後、課題研究で身に付いた力を実感していると考ええる。また、教員側も進学先でしっかりと学問を深めていくのに必要な力を、在学中の取組を通して身に付けることができていると考えている。

○生徒の効力感、負担感について明快な見解が示されおり、先生方が現状をよく観察し、把握していることが分かった。言うまでもないことだが、このような省察がなされること自体がそもそも重要なことである。その上で、これらの把握を基に、どのような指導や支援を工夫していくかが重要である。特に「一定ではない取組」は実世界で我々自身にも日常的に起こりうる事柄である。そのような「一定ではない取組」（≡不確実性）のなかで、よりよい取組を生み出すための力を身につけさせるための中等教育の段階での指導方法も探求するとよいと思う。